

訓点資料語彙の電子データ提供に向けての実践的試み

—宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』卷第八院政期点仮名点箇所訓読文用例集—

大久保綾子

はじめに

近年、ネット上での電子テキスト公開の動きが活発化し、我々はその場に居ながらにして様々な資料を閲覧可能となっている。特に、電子テキストの検索機能の発達により、求める情報が瞬時に入手可能になったことは、作業時間の飛躍的な短縮をもたらした。情報の信頼性という点において原資料を直接閲覧するのが望ましいのは言を俟たないが、十分に吟味した上での電子テキスト利用も一つの手段であり、選択肢として存在してもよいと考える。

その一方で、訓点資料言語データの電子化と活用に向けた動きには中々進捗が見られていない。

訓点資料言語を電子データ化する際に突き当たる問題点として、松本氏は「如何なる形で提供するのが、コンピュータ上で検索しやすいか否かという問題」、「一資料の全体像を提供するにも膨大な労力と時間が必要となる」問題、「資料の選別基準の問題」等を挙げている。⁽¹⁾抑、訓点資料には仮名・記号・注記など多種に渡る情報が詰め込まれており、

それらを正確に文章化すること自体に困難が伴う。更に検索の便をも考慮するとなれば、形式の確定までには多くの試行錯誤を要するであろう。

また、訓点資料言語の電子データ活用を定着させるまでの障害の一つとして、そのデータの信頼性も問題となる。言語事象や漢字の字体等を初めとする日本語史の研究において、その論拠となる資料の信頼性は極めて重要であり、原文の内容を知るに足る正確な情報が求められる。それらの要求に応えられるテキストを作成するのも、容易なことではないであろう。

上述の如き様々な困難さを伴うものの、訓点資料言語の電子データ化は決して軽視されてよいものではない。松本氏は前掲の論文で以下の様に述べる。

複数の研究者が参加した研究集団で、継続的に高山寺経蔵の調査を続けている研究者の一つの責務は、引き続き継続的に高山寺経蔵に所蔵される訓点資料の電子データの提供を考えることであろうと考えられる

日本語史の分野で扱う訓点資料であるが、非常に重要な意味を持つ資料ながらも、その特殊性及び希少性により、

一般には閲覧の期を得難いものも少なくはない。それらを調査者が積極的に公開することにより、研究者間における情報共有を進めようという意見は首肯すべきものであると言えよう。

その上で、松本氏は自らがその先駆けとなるべく、高山寺不空三蔵表制集院政期点の用例及び語彙データの一部公開を試みている。

稿者もこれらの活動に賛同すると共に、電子テキスト蓄積の一助になればとの願いから、本稿の公開に踏み切った次第である。但し、稿者は調査団等への参加経験がなく、自身で調査した資料を持たないため、翻刻の際に原本としたものは松本氏の所持する移点本であることを予めお断りしておく。また、最終的には本文の全文公開が望ましいと考えるが、それは後の課題とする。本稿では、仮名加点箇所のみを対象として、宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』の訓読文用例集作成を試みたい。

猶、本稿で扱った資料である宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』⁽²⁾に関して、高橋宏幸氏による訓読篇及び索引編⁽³⁾が既にネット上に公開されている事実を、稿者は本用例集作成後に知ることとなった。自身の不勉強を恥じると共に、一度は本稿の公開を断念することも考えた。しかし、本稿の主目的は訓読文用例集の実践的試みにあり、その点においては公開も無意味ではないであろう。このような思いか

ら、ご批判は覚悟の上で、敢て本用例集を公開させて頂く所存である。

注1 松本光隆「訓点資料語彙の文脈つき電子データ提供

の一試案―高山寺蔵不空三蔵表制集院政期点巻第一仮名点箇所訓読文用例集(稿)―」(高山寺

典籍文書総合調査団研究報告論集 平成25・3)

2 高橋宏幸「宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』院政期点〈訓読篇〉」(都留文科大学大学院紀要2号)

3 高橋宏幸「宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』院政期点〈索引編〉」(都留文科大学大学院紀要3号)

その他参考文献等

「SAT大正新脩大藏経テキストデータベース」(<http://21dzk.l.u-tokyo.ac.jp/SAT/index.html>)

小林真由美「百石讚嘆と灌仏会」(成城國文學論集26号)

宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』卷第八院政期点仮名
点箇所訓読文用例集

凡例

一、本用例集は、宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』卷第八（院政期点）の本文を底本とし、その仮名加点点箇所の本文及び検索用語を出現順に列挙したものである。

一、底本には朱と角筆による二種類の加点点が確認されるが、訓読文では前者（朱点）には何も付さず、後者（角筆点）には「」を付すことで両者を区別して示した。

一、用例の掲出においては、仮名加点点の存する箇所を中心に、一文単位で掲げることが基本としている。但し、二文で一セットの反復表現等、纏めて掲げた方が理解し易いと判断された場合には、一文に拘らず掲出している。

一、訓読文は底本のヲコト点を平仮名で示し、仮名（底本は平仮名による加点点）を片仮名で示し、補読した語句は平仮名を（ ）で括って示した。また、不読の漢字は「」で括って示し、再読字の二度目の読みも、「當に：」「當」「再讀し」のように「」で括った上で（再讀）と併記した。

一、底本の符号に関しては、合符は訓読文に生かして示した。その他、音読符・訓読符についてはそれぞれ（音）（訓）の文字を、声点については（平）（平輕）（上）（去）（入輕）（入）などの文字を当該漢字の右下に注記した。また返点は、（返）（二）（三）といった注記により同じく当該漢字右

下に示した。

一、底本の二行割注は、訓読文では一行流しとし、その後を（ ）で括ると共に改行箇所については冒頭にくる文字に／を付して示した。

一、句読点は、底本に従って、右下「・」を句点「。」で表し、中下「・」を読点を「、」で表した。句読を付すべき所に句読点のない箇所は空白として示した。

一、漢字の字体は活字正字体に従うことを原則とした。

一、所謂、誤字・宛字については、底本のままに翻字し、正しいと考えられる字体を注記することはない。

一、片仮名の字体は現行の字体に改めた。

一、漢字の右傍に付された漢字が仮名の役割を有すると判断される場合は片仮名に変換して示した。（「整」↓「整」

「モトヨリコノカク本來」↓「モトヨリコノカク本來」等）

一、漢字一字の読み仮名に仮名点とヲコト点の両方が付されている場合には、「將^モテ」のようにヲコト点を「」で括って示した。

一、外字の表示に際しては、当該箇所に「||」（示十平）の形で示した。

一、仮名の踊り字は、一字を「、」、二字以上を「／＼」で示した。

一、虫損・破損により本文の字句が欠落した箇所、及び角筆の存在は確認できるものの文字の特定が困難な箇所は□によって示した。その際の検索用語は、残存の情報により

推測した語彙を掲出した。

一、用例の所在、検索用語等の情報は、用例毎に文末に丁数行数、検索用語の順で（ ）で括って掲げた。

一、補読箇所を表記について

補読した語句の表記は、左の各項に従った。

(1) 仮名遣は、原則として、歴史的仮名遣による。

(2) 活用語尾の補読は、原則として、音便化していないもとの活用形によった。但し、一定の四段活用動詞の連用形が「テ」等に続く場合の補読には、「従テ」の如く、当該部分の活用語尾を補うことはしない。

また、活用しない語や活用語でも語幹などに音便を含む語のうち、当時既に音便の形が定着していたと思われる以下の語は、音便の形を以て基準とした。

於オイテ 以モツテ 欲ホツス (補読では「ツ」は表記しない。)

(3) 補読には濁点は一切加えない。

一、検索用語について

各用例の検索用語を決定する作業においては、左の各項に従った。

(1) 検索用語は、電子テキストとしての検索の便を考えて、和語は平仮名で、字音語または字音語に準ずるものは片仮名で語形を掲げた。

(2) 語の掲出は単語を基本単位とする。

(3) 当該語句 (用言及び助動詞) が訓読文中に活用語

として現れる場合、終止形での掲出を基本とした。

(4) 当該語句が訓読文中に音便形で現れる場合、原則として、もとの語形を掲げた。但し、以下の語については、音便形で検索語を立てた上で () で括ってもとの語形を示した。

用モツテ (モチテ) 欲ホツス (ホリス) (検索用語では「ツ」

は表記しない。)

(5) 用語掲出の際の仮名遣いは、底本の表記体系によった。但し、検索の便を考慮して、底本の仮名加点が歴史的仮名遣と異なる箇所については、() で括って歴史的仮名遣による表記も併記した。(「・きこふ・(・きこゆ・)」
「・チムリムす・(・チムリンす・)」等)

(6) 字音語の掲出においては、仮名の付されていない漢字は「・」で、仮名の付されている漢字はその読みを表記するかたちで以下の様に表した。(「整理」 「・セイ・す・」 「訶利底母」 「・・・・テイ・・」)

検索の便宜を図るため、更に、呉音に統一した読みを () で括って示した。(「整理」 「・セイ・す・(・シヤウリす・)」 「訶利底母」 「・・・・テイ・・(・カリタイモ・)」)

一、必要な注は、用例及び検索用語の掲出後に*を付して小文字で記す。

一、本用例集と高橋氏の翻刻との間でフコト点の認定等に差違がみられる箇所については、本行の*注とは別に、翻刻本文の後に纏めて掲げた。こちらについては、当該漢字

右上に付した算用数字に対応している。

○爾(の)時に文殊師利菩薩摩訶薩・即チ^{スナハ}1座(し)て起チテ・衣服(返)を整(平)―²*理し偏^{ヒト}に右の肩^{カタ}(返)を祖^{カタヌ}キ右(の)膝^{ヒサ}を地(返)に³著ケ躬^ミ(返)ヲ曲ケ*掌(返)(を)合^{アハ}セテ佛(返)(に)白(し)て言(さく)・世尊 佛の所説の如し。(一ウ2、・すなはち・たつて・セイ・す・(・シヤウリス・)・ひとへに・かた・かたぬぐ・ひざ・つく・み・を・まぐ・あはす・て・)

*「理」「て」のヲコト点を擦り消したか。

*「掌」「し」「て」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○妙徳等五百長者(返)に告(くら)くは 我汝等^{ナシクチ}(返)か爲に心地微妙(の)法門を敷(平)―演セント。(一ウ4、・なんだち・・す・(・フエンす・)・む・と・)

○而も此の道場の无量无边の人天大衆・皆(な)渴仰を生^ナス。(一ウ5、・なす・)

○我今是^{コレ}(返)カ爲^カニ如來^ニ(返)に啓^{ケイ}(上)―問(平)シタテマツル(二オ1、・これ・が・ため・に・ケイ・す・(・ケモンス・)・たてまつる・)

○云―何ナルヲカ心(返)と爲^シ云何ナルをか地と爲^ス。(二オ1、・いかなり・を・か・いかなり・)

○惟し願(は)くは世尊 无缘の大慈・无礙の大悲・諸の

衆生(返)の爲に分別演説して 苦(返)を離(れ)未⁴る者には苦(返)を離^{ハナ}ル、コトヲ得令(め) 安樂(返)ナラ未(る)者^モニハ安樂(返)(を)得令(め) 發心(返)(せ)未(る)者(には)發心(返)(を)得令(め) 證果(返)未(さる)者(には)證果(返)(を)得令(め) 同く一道(返)に於て「而」涅槃(を)得^エシメタマヘト。(二オ2、・もの・はなる・こと・を・・なり・(・アンラクなり・)・もの・に・は・う・しむ・たまふ・と・)

○爾(の)時薄伽梵 无量劫の中に諸(の)福智(返)を修して 獲^エ(返)タマヘル所の清淨決定勝法大妙智印(二)(返)を以(ニ)て文殊師利(返)を印して言はく 善^ヨイ哉善(い)哉・汝今眞^{マコト}に是^{コト}レ三世の佛母なり・(二ウ1、・う・たまふ・り・よし・かな・まことに・これ・)

○一切如來・修―行―地(返)に在^{マシ}シトキ 皆(な)⁵曾^{カッテ}テ引導して初(て)信心を發^{オコ}サシメタリ。(二ウ3、・まします・き・とき・かつて・おこす・しむ・たり・)

○是の因縁(返)を以(て)十方國土に正覺(返)(と)成^ナる者 皆(な)文殊(返)を以て「而」其の母(と)爲^ス。(二ウ4、・もの・)

○世尊・我等*聞キタヘント樂^{ネカ}フ(三オ3、・きく・たぶ・む・と・ねがふ・)

*「聞」 右傍仮名「キタヘント」、未詳。

○爾(の)時に薄伽梵・妙に善く一切如來の最勝住持・平等性智・種種(の)希有の微妙の功德(返)を成(二)―就

し 已に能く善く一切諸佛の決定勝法・大乘⁶ 智印(返)
を獲 已に善く一切如來の金剛祕密・殊勝妙智(返)を圓證
し 已に能く无闕(平)(の)大悲の自然に十方の有情(二)(返)
を救(二)攝するに安(三) *住し 已に善く妙觀察智の不
觀にして「而」觀(上)し・不説にして「而」説くを圓滿シ
タマヘリ。(三才4、・う・ゲ・ムゲ・・す・
エンマンす・)・たまふ・り・)

*「住」 左傍「三」点の下に薄い「三」点あり。

○此(の)法をは名(け)て三世の諸佛の⁷ 自ラ法樂(返)
を受(く)る微妙の寶*宮(上)(返)と爲(四才3、・みづ
から・)

*「宮」 「こと」のヲコト点を擦り消したか。

○此(の)法は能く諸の菩薩衆(返)を引(き)て色究竟の
自在智處(返)に到ス(四才5、・いたす・)

○此(の)法は能く菩提樹(二)(返)に詣(二)ス後身の菩
薩(上)(返)を引(訓)(下)く眞實の導師(返)なり「イ、
後身(の)菩薩(に)眞實(の)導師(返)(を)引キ」
(四ウ1、・いたす・ひく・)

○此(の)法は能(く)世出世の財(返)を雨ルコト摩尼寶
の衆生の願(二)(返)を滿(二)ツルか如(三)シ(四ウ2、
・ふる・こと・みつ・ごとし・)

○此の法は能(く)一切衆生の諸の惡業の果(返)を銷ス(四
ウ4、・けす・)

○此の法(は)能(く)一切衆生の所求の願(返)を與フル

印なり。(四ウ5、・あたふ・)

○此の法は能く一切衆生の苦海の波(平)浪(返)を息ム(五
才1、・やむ・)

○此の法は能く苦惱衆生の「而」急難(二)(返)(を)作(二)
すを救(三)フ(五才2、・すくふ・)

○此(の)法(は)能く一切衆生の老病死(の)海を竭ス。
(五才2、・つくす・)

○此の法は能く*生死の長夜(返)(に)*與フル大智炬(返)
「イ、炬(下欄)」爲リ「イ、生死(の)長夜の與に大智
炬爲(り)」「イ、生死(の)長夜(の)爲大智⁹ 炬に與(ふ)」
(五才4、・あたふ・ゴ・ダイチゴ・)・ともしび
・たり・)

*「生」 右傍仮名「タメ□」を擦り消した跡あり。或は、「タメ□」と
共に「與」字の付訓か。

*「與」 左傍仮名「タメ□」を擦り消した跡あり。

○此(の)法(は)能く四魔の兵衆(返)を破するに 而も
甲冑(返)¹⁰ 作り(五才5、・カフチウ・ケフヂウ・)
たり・)

○此(の)法(は)即(ち)是レ正(しく)勇猛の軍ノ¹¹
戰(平) | *勝(平)の旌(平)旗(平)「イ、旌旗」なり。
(五才5、・これ・いくさ・の・セン・旗・)・センシヨウ・)
・サイキ・(・シヤウギ・)・セイ・(・シヤウギ・)

*「勝」 右傍に角筆仮名あるか。

○此(の)法(は)即(ち)是(れ)大法の鼓(返)を擊ツ

ナリ（五ウ2、・うつ・なり・）

○此（の）法（は）猶（ほ）國の大聖王の善く能く正シク治スルに 若し王の化（返）に順スレは大安樂（返）を獲（エ）若（し）王の化（返）に違スレは尋テ誅（去）滅（二）を被（ニ）ル（カウフ）か如（三）し。（五ウ4、・ただし・す・（・ヂす・）・す・（・ジュンズ・）・う・す・（・ヰす・）・ついで・チウ・（・チュウメツ・）・かうぶる・）

○能く心（返）を觀する者は究竟して解脱す。（六オ1、・もの・）

○觀（返）すること能は不（る）者は究竟して沈（平）―淪（リム）す。（六オ2、・もの・チムリムす・（・ヂムリンす・））

○五穀五果（は）大地（返）従リ生す・（六オ3、・より・）

○一切の凡夫・善友（平）（返）に親近して心地法（返）を聞（き）て理（返）の如（く）觀察し・説（返）の如く修行し 自作・教他・讚―勵（去）・慶慰（平）セン。（六オ5、・レイす・（・サンライす・）・ヰす・（・キヤウヰす・）・む・）

○是（返）（の）如き「之」人は能く二障（返）を斷し 速に衆行（返）を圓にして 12 *疾ク阿耨多羅三藐三菩提を得む。（六ウ2、・とし・）

*「疾」 「く」のヲコト点を抹消。

○唯し心法（返）を將（モ）チテ三界の主（返）と爲（六ウ4、・もちて・（・もて・））

○心法は本*元塵穢（返）に染（せ）不（六ウ5、・もと・）

*「元」 本行「无」字、符号により右傍に「元」に訂す。

○云何ニソ心法・貪瞋癡（返）に染する（六ウ5、・いかに・ぞ・）

○三世の法（返）に於て 13 誰をか説（き）て心（返）と爲（す）（七オ1、・たれ・）

○過去の心は已に滅し 未來の心は至（返）ラ未（七オ1、・いたる・）

○現在の心は住（返）セ不（七オ2、・す・（・ヂユウす・））

○諸法の「之」内に性・不可得なり・（七オ2、・うち・）

○諸法（の）「之」外ニ相・不可得なり・（七オ3、・ほか・に・）

○諸法の中間に・都て不可得なり。（七オ3、・すべて・）

○心法（は）・本來 形相（返）有（る）こと無し（七オ4、・もとよりこのかた・）

○心 法は・ 14 本來 *住處有（る）こと無し。（七オ4、・もとよりこのかた・）

*「住」 六画目にヲコト点らしき符号あるが、未詳。

○一切の如來・尚（ほ）・心（返）を*見タマハ不（七オ5、・たまふ・ず・）

*「見」 仮名「タマハ」、正確には「不」字の右傍にあり。

○何（に）況（や）餘人・心法を見（る）こと得ンヤ。（七オ5、・う・む・や・）

○一切諸法は妄想（返）従リ生す（七オ5、・より・）

○是の因縁（返）を以（て） 15 今―者世尊・大衆（返）の爲に

三界唯心(返)なりと説キタマフト(七ウ1、・いま・とく・たまふ・と・)

○願(はく)は佛・哀愍して實(返)の如く解説シタマへ。(七ウ2、・・・す・(・ゲセチす・)・たまふ・)

○心(は)流水(返)(の)如し 念念(に)生滅して前後世(返)に於て¹⁶ 暫クも住(返)(せ)不(る)か¹⁷ 故に。(八オ1、・しばらく・)

○心は大風(返)の如(し) 一刹那の間に方所(返)に歴ルか故(に)。(八オ2、・ふ・)

○心(は)¹⁸ 電(平)光(返)の如(し) 須臾の「之」頃にして久(し)ク住(返)セ不(る)か故(に)。(八オ3、・デン・(・デンクワウ・)・あひ・ひさし・す・(・ヂユウす・)・ず・)

○心(は)虚空(返)(の)如(し) 客塵煩惱覆障(返)する所(訓)ナルか故(に)。(八オ4、・なり・)

○心(は)猿(去)―¹⁹ * 猴(上濁) (返) 「イ、猿猴」の如(し) 五欲の樹(返)に遊ヒて²⁰ 暫クも住(返)(せ)不(る)か故(に)。(八オ5、・エンコウ・(・フング・)・さる・き・あそぶ・しばらく・)

*「猴」 右傍に二本の朱線あるが、未詳。

○心は畫(平) 師(返)の如(し) 能く世間の種種の色(返)を畫するか故に。(八オ5、・エ・(・エシ・))

○心(は)僮―僕(返) 「イ、僮僕」(の)如(し) 諸煩惱(返)の爲に策(入) (二)―役(入) (返) セ*所(二)ル

(る)か故(に) (八ウ1、・ボク・(・ヅウボク・)・やつこ・シヤクヤクす・らる・)

*「所」 右傍仮名「セラル」、便宜上「セ」は「役」字につけて翻字した。

○心(は)國王(返)(の)²¹ * 如(し) 種種の事(返)を起スに自在(返)を得(るか)故(に)。(八ウ2、・おこす・) *「如」 右下にヲコト点らしき符号があるが、未詳。

○心(は)怨家(返)の如(し) 能(く)自身をして大苦(返)を受(二)ケ令(二) (むる)カ故(に)。(八ウ3、・うく・)が・)

○心(は)埃(去)塵(上) (返) 「イ、埃塵」(の)如(し) 自身(返)を全(去)―汚(汚)して「イ、全²²汚」雜穢(返)を生ずるか故(に)。(八ウ4、・アイ・(・アイチン・)・ちり・フンワす・(・ボンウす・)・けがす・)

○心(は)影(平)像(返) 「イ、影像」の如(し) 无常の法(返)に於て執して常(返)と爲るか故(に)。(八ウ4、・ヤウ・(・ヤウザウ・)・かげ・かたち・)

○心(は)夜叉(返)の如(し) 能(く)種種(の)功德法(返)を噉(去)フ(か)故(に)。(九オ1、・くらふ・)

○心は青(去)―蠅(上) (返) 「イ、青蠅」(の)如(し) 穢惡(返)を好ムカ故(に)。(九オ1、・ヨウ・(・シヤウヨウ・)・あを・はへ・このむ・が・)

○心(は)敵(對) (返) 「イ、敵對」の如(し) 常に過(返)を伺(去)フか故に。(九オ2、・ヂヤクタイ・あた・とが・うか

がふ・)

○心(は)盗(去) | 賊(返) 「イ、盗賊」(の)如(し)

功德(返)を竊ムカ故(に)。(九オ3、・ダウゾク・ぬすびと・ぬすむ・が・)

○*心は大鼓(返)の如(し) 鬪(返)戦(返)を起(す)か

故(に)。(九オ3・トウセン・(・ツセン・))

*「心」 「に」のヲコト点を抹消。

○心(は)飛(平) | 蛾(平)(返) 「イ、飛蛾」(の)如(し)

燈 | 色(返) 「イ、燈色」を愛(するか)故(に)。(九オ4、・ヒガ・とぶ・ひひる・ともしび・)

○心(は)*野(上)鹿(入)(返) (の)如(し) 23 僻 |

聲(返)を逐フ(る)か故(に)。(九オ4、・ヤロク・した

がふ・)

*「野」 去声点を抹消。

○心は群 | 24 猪(平)(返) (の)如(し) 雜穢(返)を樂

フ(か)故(に)。(九オ5、・チヨ・(・グンチヨ・)・

ねがふ・)

○心(は)衆(去)蜂(返) 「イ、衆蜂」(の)如(し)

蜜*味(返)を集ルか故(に)。(九オ5、・ホウ・(・シ

ユフ・)・はち・あつまる・)

*「味」 「に」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○心(は)醉象(返)(の)如(し) 25 牝(平)觸(返) 「イ、牝

觸」に耽ル(か)故(に)。(九ウ1、・ビム・(・ビンソ

ク・)・め・ふける・)

○諸法の中(返)に於て求ムルに得可(から)不。(九ウ2、

・もとむ・べし・) ○縁自性(返)無く 心性本空シ。(九ウ4、・もと・むなし

・) ○一(返)に不ス 異(返)に不(す) (九ウ5、・あらず

○是(返)(の)如(き)心等・无爲(返)に異ナラ不(一

○オ2、・ことなり・) ○心法(返)に非サル者 亦(た)説(く)可(から)不。

(一○オ3、・あらず・もの・) ○何を以(て)の故に 若(し)・无爲是レ心ナラハ即(ち)

斷見(返)と名く(一○オ4、・これ・なり・ば・) ○若(し)心法(返)を*離(り)セハ即(ち)常見(返)

に名く(一○オ4、・き・ば・) *「離」 左下の符号を擦り消した跡あり。右傍仮名の右上に擦り消し

の跡あり。 ○永(く)二相(返)を離(レ)て二邊に著(せ)不。(一○オ

5、・はなる・) ○是(返)(の)如く *悟(ル)者(モ)を眞諦を見(る)と名く。

(一○オ5、・さとる・もの・) *「悟」 「る」のヲコト点を抹消。

○一切の賢聖・性本(り)空寂の无爲の法の中に戒持 27

犯(返)無く 亦(た) 28 大小(返)無く 心王及(ひ)心

所の法(返)有(る)無く 苦(返)無く 樂(返)無し(一

○ウ1、・・ボム・（・ヂボム・）

○是（返）（の）如（く）法界は自性・垢（返）无く上中下の差別の「之」相無し「イ、²⁹无く」。○ウ3、・あか・）

○何を以（て）の故に・是レ无爲の法は性平等（なるか）故なり。（一〇ウ4、・これ・）

○衆の河（去濁）³⁰水海の中（返）に流—入シヌレハ 盡ク— 同く一味にして別相（二）（返）无（三）（き）か如（三）キ（か）故に。（一〇ウ5、・・・す・（・ルニフす・）・ぬ・ば・ことごとく・ごとし・）

○此の无垢の性は是は無等等なり・「於」我（音）（平）（返）を遠離し及（ひ）我（音）所を離レタリ。（一一オ1、・はなる・たり・）

○若（し）善男子善女人（返）有（り）て阿耨多羅三藐三菩提（二）（返）を求（二）（めむ）と欲（三）（ハ）ン者は 當に一心に是（返）（の）如キ心地觀の法（二）を修習（二）す應（三）し（一一オ5、・おもふ・む・もの・ごとし・）

*「提」 二点、ママ。

○爾（の）時世尊・重て・此の義（返）を宣ヘント欲シテ「而」*偈（返）を説（き）て言ハク（一一ウ2、・のぶ・む・と・おぼす・て・のたまはく・）

*「偈」 擦れあり。ヲコト点「に」を擦り消したか。

○三世覺母妙吉祥・如來に心地法を請—問シタテマツル。（一一ウ4、・・・す・（・シヤウモンす・）・たてまつる

・）

○此（の）法は遇（返）ヒ難キ（こ）ト優曇（返）に過（き）タリ（一二オ1、・あふ・かたし・こと・たり・）

○十方の諸佛の大覺（返）を證シタマヘル 此の法（返）*從（ヨ）リシテ修—成（二）セ不（二）（三）とイフコト无（三）し。（一二オ2、・・・す・（・シヨウす・）・たまふ・り・より・す・て・・・す・（・シユジヤウす・）・いふ・こと・）

*「從」 底本には「ヨリリシテ」とあるが、未詳。

○我（レ）无上調御師として 正法輪（返）を轉して世界（返）に周（去）し无量の諸の衆生（返）を化度すること 當に³¹知（返）（る）「當」（再讀）（し）心地觀を悟レル「イ、悟ル」に由（り）てなり。（一二オ3、・われ・これ・さとる・り・さとる・）

○一切有情（の）此の法（返）を*蒙（カ）ルは菩提（返）に欣（平）—趣し授記を得。（一二オ5、・かうぶる・コン—す・（・コンスす・）・う・）

*「蒙」 「て」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○一切有縁・得記の人・此の觀門（返）を修して當に佛に作ル「當」（再讀）し。（一二ウ1、・なる・）

○諸佛の自ラ大法樂（返）を受（く）る 心地觀の妙寶宮に住す。（一二ウ2、・みづから・）

○受職（レ）の菩薩の无生（返）を³²*悟（サ）ル 心地門（返）を觀して法界に遍す。（一二ウ3、・・・シキ・（・ズシキ・）・さとり・）

*「悟」 「る」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○此の法は能(く)七聖財を*雨ル。衆生の願(返)を*満ツル摩尼寶なり。(一二ウ5、・ふる・みつ・)

*「雨」 「る」のヲコト点を擦り消した跡あり。

*「滿」 「る」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○此(の)法をは名(け)て金剛甲(返)と爲(す)能く四衆の諸の魔*軍を敵(チヤク)す。(一三オ2、・ヂヤクす・)

*「軍」 「に」点及び左傍に擦り消した跡あり。

○此(の)法は能(く)*大*舟(平)航(去)作り。中(34)流(返)を渡りて寶所(二)に至(イタ)ラ*令(三)む。(一三オ3、・シウカウ・(・ダイシユガウ・)・たり・わたる

・いたる・)

*「大」 中央に斜線あるが、未詳。

*「舟」 右傍仮名「シウ」の下に角筆仮名あるか。

*「令」 二点、ママ。

○此(の)法は最勝の大法(35)鼓(ゴ)なり。(一三オ4、・コ・(・ダイホフク・))

○此(の)法は金剛大法(36)*螺(ラ)なり。(一三オ5、

・ラ・(・ダイホフラ・))

*「螺」 右傍仮名「ラ」の下に角筆仮名あるか。

○此(の)法は世(返)を*照(テラ)ス大法(炬(コ)上)「イ、炬」

なり。(一二オ5、・てらす・コ・(・ダイホフゴ・)・

ともしび・)

*「照」 右傍仮名「テラス」の下に角筆仮名あるか。

○此(の)法は猶(ほ)大聖(38)主(39)の如し。功(返)を賞(上)

し過(トカ)を罰(入)スルコト人の心に順(シタカ)フ。「イ、此(の)法(は)

猶(ほ)大聖主(の)功(を)賞(し)過(を)罰(する

こと)人(の)心(二)順(三)如(三)罰(する

(一三ウ1、・シヤウす・とが・バチす・(・ボチす・)・

こと・したがふ・)

○此(の)法は猶(ほ)沃(オク)潤(ニ)の田(返)の如(し)

生(去)成(上濁)長養(40)*時(去濁)候(平)候(二)

依(二)る。(一三ウ2、・オクニン・コウ・(・ジグ・))

*「時」 右傍に角筆仮名あるか。

○我衆の喩(タトヒ)を以て空の義(返)を明(アカ)す(一三ウ3、

たとひ・あかす・)

○是(コ)に知(シ)リヌ・三界は唯(レ)一心なり。(一三ウ3、・ここ

しる・ぬ・)

○自在に能く(41)爲(上)ス「イ、爲(す)變化の主なり。(一

三ウ4、・なす・)

○妄業(返)に依止して世間の愛(アイ)非愛の果(返)有(り)

て恆(ツネ)に相續(ス)す。(一四オ1、・アイ・つねに・)

○心は流水(返)の如(し)懸(シタカ)クも住(セ)不(す)。(一四オ2、・し

ばらく・す・(・ヂユウす・))

○心(は)飄(ヘウ)風(返)の如(し)國土(クニ)を過(ス)す。(一四

オ2、・ヘウ・(・ベウフウ・)・すぐす・)

○亦(レ)猿(コウ)猴(コウ)の樹(返)に依(り)て*戲(タハフ)ル、か

如(し)(一四オ3、・エンコウ・(・ヤング・)・たはぶる・)

*「戯」 左傍に角筆仮名あるか。

○空の飛鳥「イ、飛鳥」の尋タツ（返）ヌル所无（き）か如し（一四才4、・ヒ・・（・ヒテウ・）とぶ・とり・たづぬ・）

○空（の）聚落の人奔ハシり走ハシルカ如（し）。（一四才4、・はしる・はしる・が・）

○是（返）（の）如キ心法・本有に非ず。（一四才5、・ごとし・）

○凡夫の執・迷マトヒて无（音）に非すと謂オモフ。（一四才5、・まどふ・おもふ・）

○若（し）能く心の體性空（返）なりと觀スレは 惑障生（返）セ不スナして便スナチ解脱シヌ。（一四ウ1、・す・（・クワンズ・）・す・（・シヤウズ・）・すなはち・す・（・ゲダツす・）・ぬ・）

○爾（の）時如來・諸の衆生（返）に於て大悲心（返）を起オコシタマフ（こ）ト猶（ほ）父母の一子（返）を愛念するか如（く）して 世間の大力の邪見（返）を滅し一切有情（二）（返）を利リ益安樂ニ（三）センカ爲タメ（三）に 觀心陀羅尼（返）を宣説シタマフ（て）*曰イハク・（一四ウ2、・おこす・たまふ・こと・す・（・アンラクす・）・む・が・ため・す・（・センセチす・）・たまふ・いはく・）

*「曰」 「は」のヲコト点あるか。

○爾（の）時に如來 眞言（返）を説トキ已（り）て文殊師利菩薩摩訶薩（返）に告ツケタマハク 是（返）（の）如（き）

神呪は大威力（返）を具せり（一五才1、・とく・つぐ・たまはく・）

○若（し）善男子善女人（返）有（り）て是の呪（返）を持セン時には清淨の手を舉アケヨ。（一五才2、・す・（・ヂす・）・む・あぐ・）

○左右十指43 *更（去）一互コに相アヒ又アサヘヨ。（一五才3、・ゴ・（・キヤウゴ・）・あひあぎふ・）

*「更」 右傍に「終」とあり。

○右（返）を以（て）左を押オセ。（一五才3、・おす・）
○更サラニ相アヒ堅カクク握ニキルコト縛著の形の如（く）セヨ。（一五才4、・さらに・あひかたし・にぎる・こと・す・）
○此の印（返）を成し已（り）て前の眞言（返）を習セヨ（一五才4、・す・（・ジフす・））
○一遍（返）を45盈ヤブ（去）滿ミツ（上）セハ「於」十二部經（二）（返）を讀ヨミ念ニ（三）するに勝スグレタリ。（一五才5、・ヤフ・す・（・ヤウマンす・）・ば・すぐる・たり・）
○所獲の功德・限リミ量有アルル（こ）ト無し。（一五ウ1、・あり・こと・）
○乃至（し）菩提マテ・復（た）退轉（せ）不ナ（一五ウ1、・まで・）
○爾（の）時（に）薄伽梵 已に能く善く一切如46來の灌頂（の）寶冠の三47界（返）（に）超過セルヲ獲 已に陀羅尼自在（返）を*圓滿すること得 已に善く三摩地自在（返）を圓證し 妙に善く一切智智一切種智（返）を成48成49

*就し 能(く) 有情の種種の差別(返) を作ス。(一五ウ4、・・・す・(・テウクワす・)・り・を・なす・)

*「圓」 「こと」点と中黒点を擦り消した跡あり。

*「就」 左下に朱の縦線があるが、未詳。

○時に薄伽梵・諸の衆生(返) の爲に觀心妙法門(返) を宣説シタマフコト已(り)て 文殊師利菩薩摩訶薩(返) に告(け)て言ハク 大善男子・我衆生(返) の爲に已に心地(返) を説イツ(一六オ2、・・・す・(・センセチす・)・たまふ・こと・のたまはく・われ・とく・つ・)

○亦復(た) 當に發菩提心大陀羅尼(返) を説(き)て 諸の有情をして阿耨多羅三藐三菩提の心(返) を發シ 50 速に・妙果を圓(二) にセ*令(三) ム「當」(再讀) (三) し。(一六オ4、・おこす・まどかなり・す・しむ・)

*「令」 右傍仮名「セシム」、便宜上「セ」は「圓」字につけて翻字した。

○爾(の) 時文殊師利菩薩・佛(返) (に) 白(して) 言(さく)・世尊・佛の説(返) (き) タマフ所の*如き過去・已に滅す 未來至(返) (ら) 未 現在住(返) (せ) 不(一六ウ1、・たまふ・ごとし・)

*「如」 右傍仮名「キ」の下に角筆仮名あるか。

○彼の菩提心・何(返) を説イテか 51 *發(返) を名(く)る。(一六ウ4、・とく・て・)

*「發」 「發」字の下、「心」字を見せ消ち。

○善(き) 哉世尊 願(は) くは 52 爲に・解脱して諸の疑

網(返) を斷チて菩提に趣カ 53 *令(めた) マへ「イ、令メタマフ」「イ、令メ(よ)」。 (一六ウ4、・たつ・おもむく・たまふ・しむ・たまふ・しむ・)

*「令」 左傍仮名「シメ」の下に擦り消した跡あり。

○六十二見種種(の) 見(二) (返) を除(二) | 斷セント欲(三) フか爲(四) の故に。(一七オ1、・・・す・(・ヂヨダンす・)・む・と・おもふ・)

○心心所の法を我・説(き)て空と爲。(一七オ2、・われ・)

○譬は叢林の蒙 54 密に「イ、蒙密」茂(平) | 55 盛(去濁)ナルヲモテ「イ、茂盛」 師子・白象・虎・*狼・惡獸

・其の中(返) に潛(平) | 住して「イ、潛住」 毒 | 發して人(返) を害し廻(平) 二行跡(返) ヲ絶ツ 時に・智者(返)

有(り)て火(返) を以て林(返) を 56 燒(く) 林空(返) シキに因ルか故に諸の大惡獸復(た) 遺(平) | 57 餘(あ

る) こと「イ、遺餘」无(上) (二) キ「イ、无カルラン」 58 如(下) (三) し。(一七オ3、・ソウ・(・ズリム・)・

ム・なり・(・ムミツなり・)・きびし・ム・なり・(・ムジャウなり・)・を・もて・(・もちて・)・もし・さかり

なり・セン・す・(・ゼムヂユウす・)・かくる・すむ・はるかなり・あと・を・たつ・はやし・むなし・よる・ユイ・(・ユイヨ・)・のこり・なし・なし・らむ・)

*「狼」 右傍に角筆仮名あるか。

○又(た) 善男子・何の因縁(返) を以(て) か空の義(返)

を立ツル^ル 邪^ヤ。(一七ウ1、・たつ・や・)

○煩惱(返)を滅センか爲に 妄心の生(返) (する)に⁵⁹ 從^{シタカテ}テ
「而」⁶⁰ 是^コレ空なりと説く。(一七ウ2、・す・(・メツす
・)・む・したがふ・て・これ・)

○善男子 若(し) 空の理(返)を執して究竟(返)と爲る者
は 空の性も亦(た)⁶¹ 空ナルに空(返)を執して病(返)を作
ス(一七ウ2、・もの・なり・なす・)

○何(を)以(ての) 故に 若(し) 空の義(返)を執して
究竟(返)と爲ハ「者」諸法皆(な) 空(に)して 因(返)
无く果無し。(一七ウ4、・す・ば・)

○路(去) 伽(上) 邪(上) 陀(上濁) (と) 何の差別か有(ら)
む。(一七ウ5、・ロカヤダ・(・ルギヤヤダ・))

○善男子 阿(去) 伽(上) 陀(上濁) 藥(返)の如(く) 能(く)
諸の病(返)を療(去)す(一七ウ5、・レウす・)

○若(し) 病(返) 有る者^モは之(返)を服(せ)は必(訓) (す) 差^イ
ユ。(一八オ1、・やまひ・もの・いゆ・)

○其(の) 病・既に*愈^イエヌレハ*藥病(返)に隨(ひ)て
* 除^クル。(一八オ1、・いゆ・ぬ・ば・のぞこる・)

*「愈」 「は」のヲコト点を擦り消したか。

*「藥」 「は」のヲコト点を擦り消したか。

*「除」 「る」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○病(返) 无(き)に藥(返)を服(せ)は藥還て病を成^ナス。
(一八オ2、・なす・)

○善男子 本・空の藥(返)を設^{マク}ケシコトハ⁶² 有の病(返)

を⁶³ 除^クカン(か) 爲なり(一八オ2、・くすり・まうく・
き・こと・は・のぞく・む・)

○有(返)を執して病(返)を成(上濁) セハ空(返)を⁶⁴ 執
センも亦(た) 然なり。(一八オ3、・す・(・ジャウす
・)・ば・す・(・シフす・)・む・)

○誰の有智の者^モか藥(返)を服(し)て病を取^トラン。(一八
オ4、・もの・とる・む・)

○善男子 若(し) 有の見(返)を起サンは空の見を起(さ
む)に勝^スレタリ。(一八オ4、・おこす・む・すぐる・たり
・)

○空ヲモテ有の病を治す。(一八オ5、・を・もて・(・も
ちて・))

○善男子 是の因縁(返)を以(て)「於」空の藥(返)を服
(し)て邪見(返)を除^クキ已^ハナは 自^{ミツ}ラ・心(返)を覺悟
して能く菩提を發セ。(一八オ5、・のぞく・をはる・ぬ・
みづから・おこす・)

○二相有^アル(こ)ト无(し)。(一八ウ2、・あり・こと・)
○善男子・凡夫の二⁶⁵ 心・其の相云^イ何ニソ。(一八ウ4、・
いかに・ぞ・)

○一(は)「者」眼識乃至(し) 意識・同く自*境(平) (返)
を⁶⁶ 緣(上) スレハ自悟心(返)と名く(一八ウ5、・す
・(・エンす・)・ば・)

*「境」 右傍に角筆仮名あるか。

○二(は)「者」「於」五根(返)を離(れ)て心心所の法・

和合して境(平) (返) を縁(上) スレは自悟心と名(く)。(一
九才1、・・す・(・エンす・))

○善男子 賢聖の二心・其の相云何ニソ。(一九才2、・い
かに・ぞ・)

○凡夫の行者の最初發心・何等の處(返) に依(り)て何等
の相をか觀セント。(一九ウ1、・・す・(・クワンず・)・
む・と・)

○胸臆の上(返) に於て明―*朗(上) 「イ、明朗」ニし
て「而」住す(一九ウ3、・んね・うへ・・ラウなり・(・
ミヤウラウなり・)・あきらかなり・ほがらかなり・)

*「朗」 右傍仮名「ラウ」の下に角筆仮名あるか。

○若(し) 速に不退轉(返) を得むと欲(オモ)ハン者(モノ)ハ 阿蘭(去)
若・及(ひ) 空寂の室(返) 「イ、空寂室」に在(ニ)

(り)て身(返) を端クシ念(オモヒ) (返) を正シクして 前の如來
金剛縛印(返) を結(ひ)て 目(返) を冥イテ臆(ムネ)の中の明
月(返) を觀―察して是の思惟(返) を作(ナ)セ(一九ウ3、・お
もふ・む・もの・は・・ラン・(・アランニヤ・)・むな
し・しづかなり・むろ・なほし・す・おもひ・ただし・さ
き・ひさぐ・て・むね・なす・)

○塵(チン) 翳(エイ) (上) 染(返) すること無く *妄想生(返) セ
不(ニ)オ才2、・ヂンエイ・(・ヂンアイ・)・す・(・
シヤウず・)

*「妄」 右傍に角筆仮名あるか。

○能(く) 衆生をして身心清淨(二) (返) ナラ令(二) (め)

大菩提心・堅固にして退(か) 不(ニ)オ才3、・・な
り・(・シヤウジヤウなり・)

○此(の) 手印(返) を結(ひ)て 大菩提心(の) 微妙
(の) 章句(たる) 一切菩薩(の) 最初發心清淨眞言(上)
を持(下) ―念―觀―察セヨ(二)オ才4、・・イン・(・シユ
イン・)・す・(・クワンセチす・)

○能く行者をして復(た) 退轉(二) セ不(ニ)ラ令(三) ム。
(二)ウ2、・・す・(・タイテンす・)・ず・しむ・)

○去來現在の一切菩薩・「於」因地(返) に在りて初て發
心セシ時・悉(く) 皆(な) 念(返) を專にして此の眞言(返)
を 持(タ)チて不退の地(返) に入り 速に正覺を圓(マ)ニセリ。(二
○ウ2、・あり・・す・(・ホツシムす・)・き・たもつ
・いる・まどかなり・す・り・)

○善男子 時に彼の行者・身(返) を端クシ念(返) を正シ
クして 都テ動―搖(去) (返) セ不して心を・月輪(返) に繫
けて 成―就(成) 就觀―察セヨ。(二)ウ4、・なほし・ただし
・すべて・・エウす・(・ヅウエウす・)・かく・・す・
(・クワンセチす・)

○若(し) 凡夫(返) 有(り)て此の觀(返) を修セン者(者)ハ
起(返) す所の五逆四重十惡及(ひ) 一 70 闡提・是(返)
(の) 如(き) 等の罪盡く皆(な) 71 清滅して 即(ち)
五種の三摩地門を*獲(ト)ン。(二)一才1、・・す・(・シユす
・)・む・もの・・セム・(・イチセンダイ・)・う・む
・)

*「獲」 「く」のヲコト点らしき符号あり。

○云何ナルヲカ五(返)と爲る(二一才4、・いかなり・をか・)

○一に者刹那三昧・二(に)者微塵三昧・三(に)者白*縷(上)三昧・四(に)者起伏三昧・五(に)者安住三昧なり。(二一才4、・ル・(・ビヤクル・))

*「縷」 左傍に角筆仮名あるか。

○云何ナルヲカ名(け)て刹那三昧(返)と爲る(二一ウ1、・いかなり・をか・)

○謂(はく) 蹶ク満一月(返)を想(二一)念して「而」住す。(二一ウ1、・しばらく・)

○譬は彌猴の身に繫(二)カレタル所(三)有(三)ル 72 遠□□ニ去(返)ルコト得不 73 近クル(に)停(返)ルコト得不 唯(た)飢渴(返)に*困ンて須臾住止(上)するか如(下)く。(二一ウ1、・ミコウ・(・ミグ・)・つなく・る・たり・ところ・あり・とをざく・(・とほざく・)・に・さる・こと・ちかづく・とどまる・こと・たしなむ・)

*「困」 「困」字と「飢」字の間、中央の合符を擦り消した跡あり。

○蹶ク三昧(返)を得ルヲ名(け)て刹那と爲。(二一ウ3、・しばらく・う・を・)

○譬は人(返)有(り)て常に自ラ 74 苦(返)ヲ食フ *會(三)て甜(二)キを食(二)未(三)「於」一時の中に一塵の蜜・「於」舌根(二)に到(二)ルコトを得(三)

て「イ、一塵(の)蜜を得(て)」「於」舌根(に)到(りて)「歡喜(返)を増勝し」「イ、増シ勝」倍踊躍(返)を生して更に多塵(返)を求(上) (むる)か如(下)く(二一ウ5、・みづから・にがさ・を・くらふ・かつて・あまし・いたる・こと・ます・ますます・)

*「會」 右傍仮名「カツタ」とあるが、未詳。

○是(返)の如く行者・「於」長劫(返)を經テ衆の苦*味(返)を食して「而」今甘(去)甜(平)の三昧(返)與「イ、「與」甘甜(の)三昧と」少分相一應(二) (返)すると得(二)るを名(け)て微塵と爲。(二二才2、・ふ・て・カムデム・)

*「味」 右傍に角筆仮名あるか。

○云何(なるをか)名(けて)白縷(上)「イ、白縷」三昧(返) (と)爲る(二二才4、・ル・(・ビヤクル・)・いと・) ○謂(は)く凡夫の人・无始の時(訓) (二) (返) 自(二)リ未來際(返)を盡す(二二才4、・より・)

○今・此の定を得タリ。(二二才5、・う・たり・)

○譬は染一皂(去)「イ、染一皂」の多くの黒色の中に一の白*縷「イ、白縷」を見(二) (る)か如(三)く。(二二才5、・サウ・(・ネムカウ・)・くり・ル・(・ビヤクル・)・しろし・いと・)

*「縷」 右傍仮名「ル」の下に角筆仮名あるか。

○是(返) (の)如(く)行者 「於」多(く)の生死の 75 里闇夜の 76 中に而も今方に白淨の三昧(返)を得タルを名(け)て「之」縷と爲。(二二ウ1、・う・たり・)

○云何ナルヲか名(け)て起伏三昧(返)と爲る(二二ウ2、
・いかなり・を・)

○所謂行者・觀心・熟(返) 未(ス) (二二ウ3、・いはゆる
・す・(・ジユクす・)・ず・)

○*或(アルトキ)には善(く) 成立し 善(く) 成立せ未(ス)。(二二ウ
3、・ある・とき・す・(・ジャウリフす・))

*「或」 右上、ヲコト点らしき横線を擦り消した跡あり。

○是(返) (の) 如(く) 三昧・ 77 Ⅱ (示十平) の低(平)

―*昂(平)の「イ、低昂」猶(ニ)クナルを名(け)て
・起伏と*爲(ス)。(二二ウ3、・はかり・テイカウ・(・タイ
ガウ・)・くだる・あがる・り・)とし・なり・す・)

*「昂」 右傍朱筆の下に角筆仮名「カウ」あるか。

*「爲」 右傍仮名「スル」、「ル」字を擦り消した跡あり。

○前の四の定(返)を修して安住(返)すると心得 善く 78
能く守護して諸の塵に染マ不(サ)ルなり。(二二ウ5、・こころ
う・そむ・ず・)

○人の*夏の中に遠ク 砂(去) ―磧(入) (返)を涉(ワ)りて
備に 79 災毒(返)を受(ウ)けて其の心渴乏して 殆(ホト)堪(ニ) (返)

フル所(ニ) 无(三) (き)か 忽(タチマ)ちに 雪(セ)山の甘(カ) ―美(平)
(の)「之」水・天の 80 蘇(去) ― 陀(上) 等(返)を得

て 頓(ニ)に熱(ニ)惱(返)を除(ノ)キ身意(タイ)泰(平) 然(上) ナランか
如(下)し。(二三オ1、・とをし・(・とほし・)・シヤ・
・(・シヤシヤク・)・わたる・うく・ほとほど・たふ・た
ちまちに・セチ・(・セチセン・)・カンミ・(・カムミ

・)・みづ・ソタラ・(・スダラ・)・にはかなり・のぞく
・タイ・なり・(・タイネンなり・)・む・)

*「夏」 「夏」字と「中」字の間、中央の合符を擦り消した跡あり。
○此の定(返)に入り已(り)て惑障(返)を遠離して无上
菩提の「之」芽(返)を發生し 83 速(スミヤカ)に菩薩の功德十地に登(ノ)ル。
(二三オ3、・いる・すみやかに・のぼる・)

○爾(の) 時會中の无量の天人・此の甚深の諸菩薩(の)
母・不可思議(なる) 大陀羅*尼(返)を聞(き)已(り)
て 九萬八千の諸の菩薩等・歡喜地(返)を證し 无量衆

84 生・阿耨多羅三藐三菩提の心を發シキ。(二三オ5、・き
く・おこす・き・)

*「尼」 四画目上の朱点、未詳。

○周遍(せ) *不(ト)イフコト靡(ナ)シ。(二四オ2、・いふ・こ
と・なし・)

*「不」 「く」のヲコト点らしき符号あるが、未詳。

○是に薄伽梵・文殊師利菩薩摩訶薩(返) (に) 告(け)て言
ハク・瑜(去) 伽(上) 行者・月輪(返)を觀し已(り)て
三種の大祕密の法を觀す應し。(二四オ3、・いはく・ユ・
・(・ユギヤ・))

○云何ナルをか三(返)と爲(ス)る(二四オ5、・いかなり・)

○瑜伽行者・滿月の中に金色の五股金剛(返)を出(シ)生(ス)
光明煥(去) ― 然(平濁) トシテ猶(ほ)・鎔(去) 85 金(上) (返)

(の) 如し 「於」 無數の大 86 日光明(ニ) (返)を放(ハ)す
ツト觀(三) セヨ(二四ウ1、・なか・クワン・たり・(・ク

ワンネンたり・す・て・ヨウ・（・ユウコム・）は
なつ・と・す・（・クワンズ・）

○道場の中（返）に於て 身（返）を端クシ念（返）を正シウ
して手に引導無上菩提最第一印（返）を結（ひ）て 胸臆の
心月輪の中（返）に安置するなり（二五才2、・なほし・
す・ただし・て・むね・なか・）

○先（つ）左右（の）二大母指（を）以（て）各（の）左
右（の）手掌（の）「之」内（に）入（れ）各（の）左
右（の）⁸⁷頭中指及（ひ）名⁸⁸十指（を）以（て）母指（を）
堅⁸⁹＊握（入）（し）・「於」⁹⁰手拳（を）作（る）・（二五
才5、・アクス・ケンアクス・）

*「握」 右傍仮名「アク」の下に角筆仮名あるか。

○次（に）改拳（上）（せ）不⁹¹右（の）頭指（を）舒（平）
（し）・虚空（に）直堅（上）（し）・其（の）左拳（を）以
（て）・「於」心上（に）著（け）・右拳（の）小指・左拳
・頭＊指一節（を）堅（去）握（す）・（二五ウ2、・カイ・
す・（・カイグエンす・）・シヨす・シユす・（・デキジ
ユす・）・ケンアクス・）

*「指」 「指」字下「於」字を抹消符により抹消。

○次（に）右拳・頭指（の）「之」頭（を）以（て）即（ち）
右拳・拇（平）指一節（を）指（し）・亦（た）心前（に）
著（く）・（二五ウ4、・モ・（・モシ・）

○此の⁹²印（返）をは結（ひ）て加―持する力（二）（返）を
以（二）（て）の故に 十方の諸佛・行者の頂（返）を摩テ

、大菩提勝決定の記を授（訓）（け）タマフ。（二六才2、
なづ・て・たまふ・）

○是レ⁹³ 毘盧遮那如來の无盡福聚大妙智印なり。（二六才
3、・これ・）

○爾（の）時行者・此の印（返）を結ヒ已（り）て 即（ち）
此の觀を作レ。（二六才4、・むすぶ・つくる・）

○我今首の上に・大寶冠（返）有（り）（二六ウ2、・かう
べ・）

○其の天冠の中に五佛如來結跏＊趺坐シタマヘリ。（二六ウ
2、・す・ケチケフザす・）たまふ・り・）

*「趺」 「し」点を擦り消したか。

○⁹⁴ 譬は人（返）有（り）て迦盧（上）羅微⁹⁵ 妙門を悟レリ。
自（ら）是の觀（返）を作ル 我か身は即（ち）是（れ）金
翅鳥王なり。心・意・語言・亦復（た）是（返）（の）如（し）
此の觀力（返）を以て能（く）毒藥（返）を消す 一切の
惡毒・害（上）を爲スコト能は不（中）るか如（下）く。（二
七才1、・ル・（・ケルラミメウモン・）・さと
る・り・つくる・なす・こと・）

降伏の坐（返）を作りて身動搖（去）（返）セ不（二七才4、
・つくる・エウす・（・ヅウエウす・）

○手に智印（返）を結ヒ密に眞言（返）を念し⁹⁶ 心・此（の）
觀（返）に入レハ 能（く）三毒（返）を滅し業障（返）を消
除し福智（返）を増長す（二七才5、・むすぶ・こころ・い
る・ば・）

○世出世の願・速に圓滿すること得。(二七ウ1、・う・)
 ○恆河沙等の所知(の)重障・⁹⁷漸漸に消滅す(二七ウ2、
 ・やうやうに・)
 ○爾(の)時文殊師利菩薩・佛(に)白(して)言(さく)
 ・希有なり世尊・希有なり善逝・如來・世(返)に出テタマ
 フこと優曇花(返)に過キタリ(二七ウ5、・いづ・たまふ
 ・すぐ・たり・)
 ○假^グ使ヒ世(返)に出(て)タマヘリトモ 是の法(返)
 を⁹⁸説(き)タマフ「イ、説く」こと難し。(二八オ1、・
 たとひ・たまふ・り・と・も・たまふ・)
 ○是(返) (の) 如キ心地の三種祕密・无上法輪は 能く善
 く一切衆生を利樂す。(二八オ2、・ごとし・)
 ○如來地及(ひ)菩薩地(返)に入ル眞實の正路なり。(二
 八オ3、・いる・)
 ○若(し)衆生(返)有(り)て 身命(返)を惜(ま)不^サ
 此の法(返)を修行センハ 速に菩提を證す。(二八オ4、・
 ・す・シユギヤウス・)・む・は・)
 ○爾(の)時佛 文殊師利菩薩(返) (に)⁹⁹告(けて)言
 (はく)・若(し)善男子善女人(返)有(り)て 三種祕
 密成佛妙門(返)を修習して早(く)如來の功德の身(二)(返)
 を獲^ニントを得(三)(むと)欲^ホセンは「者」「イ、
 欲(せん)者」當に菩薩の三十二種の大金剛甲を¹⁰⁰*着
 ル「當」(再讀)し。(二八オ4、・う・む・こと・ほす・(・
 ほりす・)・む・きる・)

*「着」 「る」のヲコト点を擦り消したか。
 ○此の妙觀(返)を修センに必ず如來の清淨法身を證す。(二
 八ウ2、・す・シユス・)・む・)
 ○一は「者」「於」无量劫に衆生(返)の爲の故に生死(返)
 を厭ハ不して苦(返)を受(く)る大甲・(二八ウ4、・いと
 ふ・)
 ○二(は)「者」誓(ひ)て无量の有情(返)を度(し)て
 乃至(し) 螻^{ロウ}(平)¹⁰¹*蟻(平)「イ、螻蟻」マテ捨(返)
 (て)不る大甲・(二八ウ5、・ロウ・(・ルギ・)・けら
 ・あり・まで・)
 *「蟻」 右傍仮名「マテ」の下に角筆仮名あるか。
 ○三(は)「者」衆生の生死の長キ夢^{ユメ}(返)を覺悟して「イ、覺悟」
 三種祕密(返)に安置する大甲・(二九オ1、・ながし・ゆめ
 ・さます・て・)
 ○四(は)「者」佛法(返)を擁護して「於」一切一時に猶
 (ほ)*響(平)應(平)(返)の如(く)して法(返)を護(訓)
 ル大甲・(二九オ2、・まもる・)
 *「響」 右傍に角筆仮名あるか。
 ○五(は)「者」永ク能く有無の二見(二)(返)を
 起(二)す一切の煩惱(二)(返)を滅(二)する金剛大
 甲・(二九オ3、・ながし・)
 ○六(は)「者」頭目¹⁰²體腦妻子珍寶・來^{キタ}リ¹⁰³求(返)ム(る
 こと)有る者に能く捨(訓) (つ)る大甲・(二九オ4、・き
 たる・もとむ・もの・)

○七(は)「者」家の中の所受の一切の樂―具・永く¹⁰⁴貧着(返)セ不(し)て能く施する大甲・(二九オ5、・・・す・(・ピンヂヤクス・))

○八(は)「者」能く菩薩の三聚淨戒(二)(返)を持(三)チ及(ひ)頭陀(返)を捨離セ不る大甲・(二九ウ1、・たもつ・・・す・(・シヤリス・))

○九(は)「者」忍辱の衣(返)を着テ諸の違縁・毀(平)罵鞭(去)打(二)(返)に遇(二)フに報(返)セ不る大甲・(二九ウ2、・ころも・きる・て・キ・(・キエン・)・・メ・(・クキメ・)・ベム・(・ヘンチャウ・)・あふ・す・(・ホウズ・))

○十(は)「者」所有の一切の緣覺聲聞(返)を教化して一乘に趣キ廻(去)心(上)(返)セ令(む)る大甲・(二九ウ3、・おもむく・エ・す・(・エシムす・))

○十一(は)「者」譬は大風の晝夜に歇(二)(返)マ不(三)(る)か如(三)く諸有情(返)を度ス精進大甲・(二九ウ4、・やむ・わたす・)

○十三(は)「者」生死涅槃に二見(返)有(る)こと无(く)して衆生(返)を饒益するに平等ナル大甲・(三〇オ1、・・・なり・(・ビヤウトウなり・))

○十四(は)「者」无缘の大慈・群品(返)を利益するに恆(ツネ)に厭捨(返)无(く)して樂(返)を與フル大甲・(三〇オ3、・つねに・あたふ・)

○十五(は)「者」无礙(の)大悲・一切(返)を救攝する

に限量(返)有ル(二)ト无(く)して苦(返)を抜ク大甲・(三〇オ4、・あり・こと・ぬく・)

○十六(は)「者」諸の衆生(返)に於て¹⁰⁶怨(去)結(返)有(る)こと无(く)して恆に饒益(返)を作す大喜大甲・(三〇オ5、・ラム・(・ランケチ・))

○十七(は)「者」*難行¹⁰⁷者苦行に劬(平)勞(二)(返)を憚(二)ラ不(三)して恆に退轉(返)无キ大捨大甲・(三〇ウ1、・グラウ・はばかり・つねに・)

*「難」本行「雖」字、符号により右傍に「難」字に訂す。

○十八(は)「者」苦(返)有ル衆生・菩薩の所(返)に來るに彼(返)に代(り)て苦(返)を受(け)て厭(返)ハ不る大甲・(三〇ウ2、・あり・いとふ・)

○十九(は)「者」掌の中の阿摩勒果(二)(返)を¹⁰⁸觀(三)ルか如(三)く是(返)(の)如(く)能(く)解脱(返)を見る大甲・(三〇ウ3、・みる・)

○二十(は)「者」五蘊の身は旃陀羅(返)の如(三)しト見(三)て損*害と善^{109 110}*事とを・着(返)无キ大甲・(三〇ウ4、・と・なし・)

*「害」「す」「こと」のヲコト点を擦り消した跡あり。

*「事」右傍に二字の仮名があるが、未詳。

○二十一(は)「者」十二入は空聚落(二)(返)の¹¹¹如(三)(し)ト見(三)て常に恐怖(返)を懷イテ厭捨する大甲・(三〇ウ5、・と・いだく・て・)

○二十四(は)「者」¹¹²佗人の惡(返)を掩ヒ¹¹³己カ過(返)

を*藏(き)不三界(返)を厭離する出世大甲・(三一オ4、・おほふ・おの・が・かくす・)

*「藏」 右傍仮名「カクス」、「ス」字を擦り消した跡あり。

○二十五(は)「者」大醫王の病(返)に應へテ藥(返)を與フルか如く 菩薩・宜(返)に隨(ひ)て演化する大甲・(三一オ5、・かなふ・て・あたふ・)

○二十六(は)「者」彼の三乗體・本異(二)(返)ナラ不(二)ト見(三)て 究竟して心(返)を廻し一(返)に歸(上)セシムル大甲・(三一ウ1、・ことなり・と・めぐらす・す・(・クエす・)・しむ・)

○二十七(は)「者」三寶の種(返)を紹イテ斷絶(返)セ不ラ*使ムトシテ 妙法輪(返)を轉して人(返)を度す大甲・(三一ウ2、・つぐ・て・す・(・ダンゼツす・)・ず・しむ・と・す・て・)

*「使」 右傍仮名「ムト」、下の字を擦り消し重書した跡あり。

○二十八(は)「者」佛・衆生(返)に於て大恩德(返)有す「イ、有」佛恩(返)を報(去)センか爲に道(返)を修する大甲・(三一ウ4、・まします・す・(・ホウず・)・む・)

○三十(は)「者」无生忍(返)を悟リ陀羅尼樂説辯才(返)を得る无礙大甲・(三二オ1、・さとる・)

○三十一(は)「者」廣く有情(返)を化して 菩提樹(返)に坐セシメ佛¹¹⁴果(返)を證(せ)令(む)る一味大甲・(三二オ2、・す・(・ザす・)・しむ・)

○三十二(は)「者」一刹那の心・般¹¹⁵*若ト相應して三世の法(返)を悟ルコト餘(返)无キ大甲なり。(三二オ3、・と・さとる・こと・なし・)

*「若」 「こと」点を擦り消した跡あり。

○文殊師利菩薩・若(し)善男子善女人(返)有(り)て身に是(返)(の)如(き)金剛¹¹⁶甲一胃(二)(返)「イ、甲胃」を被(二)テハ 當に勤メテ三種の祕密(二)を修(二)習す「當」(再讀)し。(三二オ5、・み・チウ・(・ケフヂウ・)・かぶと・よろひ・きる・て・は・つとむ・て・)

○「於」現世の中に大福智(返)を具して 速に无上正等菩提を證セン。(三二ウ2、・す・(・シヨウす・)・む・)

○爾(の)時大聖文殊師利菩薩摩訶薩・及(ひ)諸の大衆・佛の所説の三種祕密心地妙法・及(ひ)三十二金剛甲胃・一切の菩薩の¹¹⁷學(二)(返)スル所(二)に應(去)(三)セル處(上)(返)ナルを聞(下)キタマへて 各(の)・无價の¹¹⁸櫻珞寶衣(二)(返)を脱(二)イテ 毘盧遮那如來・及(ひ)十方の世尊(二)(返)に供(二)養シタテマツル(三二ウ3、・す・(・ガクす・)・す・(・オウず・)・り・ところ・なり・きく・たまふ・ぬぐ・て・す・(・クヤウす・)・たてまつる・)

○而(こ)て佛(返)を讚(め)て¹¹⁹言(マ)サク 善(き)哉善(き)哉・佛薄伽梵・无邊の菩薩の行願(返)を演説して一切衆生(返)を利益安樂し 凡夫の身(返)を捨テ、佛地に入ラ使メタマフ。(三三オ2、・まうす・すつ・て・いる・しむ・)

たまふ・)

○¹²⁰ 今^{イマ}―者我等^ラ海^平會の大衆・佛恩^返を報センか爲
に 身命^返を*惜^{ヲシ}マ不^スして諸の衆生^返の爲に諸の佛
土^返に遍して 此の微妙の法^二返^一を分―別^二演^シ
説し 受持 讀誦 書寫 流布して斷―絶セ不^レら^一 121 令
メン。(三三三才4、・いま・われら・す・(・ホウズ・)・
む・をしむ・ず・す・(・ダンゼツす・)・しむ・む・)
*「惜」 右傍仮名「ヲシマス」、便宜上「ス」は「不」字につけて翻
字した。

○唯し願^{ハク}ははくは如來 遙^{ハルカ}に護念を垂^タレタマへ。(三三
ウ2、・はるかなり・たる・たまふ・)

○爾^の時に大會・此^の妙法^返を聞^キて大饒
益^返を得^ツ(三三ウ2、・う・)

○稱計^す可^{から}不^る無數^の菩薩・各^の不
退轉^の位^訓 二^に證^二悟^一すること*得^ツ。(三三
三ウ3、・う・)

*「得」 三点に虫損あり。

○乃至^し五趣の一切有情・¹²²諸の重¹²³障^返を¹²⁴斷
チテ无¹²⁵量の¹²⁶樂^返を得^ツ(三三ウ4、・たつ・て・う・)
○¹²⁷悉く皆^な 128 當に阿耨多羅三藐三菩¹²⁹提を得
「當^ハ」(再讀) カリキ。(三三ウ5、・べし・き・)

○爾^の時釋迦牟尼如來・文殊師利菩薩等の阿僧祇海會
大衆^返に告^げて言^{はく}・我^於无量那庾多百
千大劫に身命^返を*惜^{ヲシ}マ不^スして 頭目手足・血^{クニチ}入^ニ穴^ニ入^ル

骨髓・妻子國城・一切の珍寶・來^キり求^{モト}ムルこと有る
¹³⁰者^{モト}に悉く用^モテ布施^セし・百千の難行苦行^返を修習して大
乗心地觀門を獲―證せり。(三四才3、・をしむ・ず・クエ
チ・ニク・きたる・もとむ・もの・もて・(・もちて・)・)
*「惜」 右傍仮名「ヲシマス」、便宜上「ス」は「不」字につけて翻
字した。

○當^に知^返 二^に當^一 二^に當^一 此の甚深の
經は十方三世の无上十力の「之」宣―説^二シタマフ所^二
なり。(三四ウ3、・す・(・センセチす・)・たまふ・)
○「於」此の三千大千世界・十方の諸佛の國土の「之」中
に有^返る所の无邊の諸の有情類・傍生餓鬼・地獄の衆生
・此の大乗心地觀經の殊勝の功德・威神の「之」力^返に
由^二諸^一苦^返を離^{ハナ}レ安樂^二受^二
(くる)ことを得^テ 令^四む。(三四ウ5、・はなる・
う・)

○能く所在の國土をして 豐樂にして諸の怨敵^二无^二
カラ令^三む。(三五才3、・なし・)

○譬は人^返有^りて如意珠^返を得て「於」家^イの中^返
に置^キて 能く一切の殊妙の樂具^二返^一を生^二する
か如^三く(三五才4、・いへ・おく・)

○能く國界に无盡の安樂^二を與^ニフ。(三五才5、・
あたふ・)

○亦^た三十三天の末尼の天鼓の・能く種種の百千の音
聲^返を出して 彼の天衆をして諸の快樂^二返^一を受^二

(け) 令(三) (む) るか如(四) く(三五ウ1、・つづみ・)
 ○能(く) 國界をして最勝安樂ナラ令む。(三五ウ3、・
 ・なり・(・アンラクなり・))
 ○是の因縁(返) を以て汝等大衆・大忍力(返) に住して此
 の經を流通セヨ。(三五ウ4、・・・す・(・ルツウす・))
 ○善逝・¹³¹ ¹³² 乃^{イマシ}甚深の大乗微妙心地觀經(二) (返) を説(二
 (き) て 能(く) 廣く大乘の行者(返) を利益シタマフ(三
 六才1、・いまし・・・す・(・リヤクス・)・たまふ・)
 ○若(し) 善男子善女人(返) 有(り) て能く此(の) 經の
 乃至(し) 一四句偈(返) を持セン(三六才3、・・・す・(・
 ぢす・)・む・)
 ○是(返) (の) 如(き) 「之」人・幾^{イッパ} | 所クノ福(二) をか
 得(二) くる。(三六才4、・いくばく・の・)
 ○爾(の) 時薄伽梵・文殊師利菩薩(返) (に) 告(け) て
 言(はく) ・若(し) 善男子善女人(返) 有(り) て「於」
 恆河沙三千大千世界に・中に七寶(返) を滿テ、以^モ | 用テ十
 方の諸佛(返) に供養し 一一の佛(返) の爲に精舎(上濁) (返)
 を造立して七寶莊嚴して佛及(ひ) 菩薩(二) (返) を安(二
 | 置 | 供養センコト 恆沙劫を滿てむ。(三六才4、・みつ
 ・て・もて・(・もちて・)・・・す・(・クヤウす・)・む
 ・こと・)
 ○彼の諸の如來の所有の無量の聲聞弟子に亦(た) | 以て
 一切の所須(返) を供養センコト 佛(返) を供養するか如
 く等(しく) して差別(返) 无カラン(三六ウ3、・・・す

・(・クヤウす・)・む・こと・なし・む・)
 ○是(返) (の) 如(き) 諸佛・及(ひ) 聲¹³³ 聞等の般涅
 槃の後に 大寶塔(返) を起^タテ、舍利を供養セン。(三六ウ
 5、・たつ・て・・・す・(・クヤウす・)・む・)
 ○¹³⁴ 彼の種種(の) 供養の功德(返) を*以て此の説經の
 所獲の功德(返) に比^ヒする「イ、タ比フ」に 十六分の中に
 其の一に及(は) 不^シ。(三七才3、・ヒす・たくらぶ・)
 *「以」 三・四画面辺りに朱の横線あるが、未詳。
 ○況(や) 能く具足して受持讀習し・廣く人(返) の爲に説
 (か) むヲヤ。(三七才5、・を・や・)
 ○「於」現身の中に十種の勝利の「之」福を感得セン。(三
 七ウ4、・・・す・(・コムトクス・)・む・)
 ○五(は) 「者」資財に乏^{トモ}シカラ不^ナ。(三八才1、・ともし
 ・)
 ○六(は) 「者」皮膚^ヒ潤^{ヨウニン}*澤「イ、皮膚潤澤」なり。(三
 八才1、・ヒヨウ・(・ビフ・)・ニン^{カバハタヘウルヒ}・なり・(・ニンヂヤ
 クなり・)・かは・はだへ・うるひ・)
 *「澤」 左傍に某字を擦り消した跡あり。
 ○七(は) 「者」人(返) の爲に愛 | 敬セラル。(三八才2、
 ・・・す・(・アイキヤウす・)・らる・)
 ○八(は) 「者」孝養の子を得^ユン。(三八才2、・う・む・)
 ○九(は) 「者」眷屬和睦(入) す「和睦」。(三八才2、・
 むつぶ・む・)
 ○此の經典の所在の若(き) 「之」處は即(ち) 佛及(ひ)

諸の菩薩・縁覺聲聞*有るに爲レハナリ。(三八ウ1、・なる・ば・なり・)

*「有」 「に」点、ママ。

○何(を)以(ての)故(に) 一切の如來・此の經(返)を修行して凡夫(返)を捨(て)已(り)て阿耨多羅三藐三菩提(返)を得(得)一切の賢聖・皆(な)此の經(返) (に)從(ひ)解脱(返)を得ルか故なり。(三八ウ2、・う・う・)

○文殊師利・我か涅槃の後・後五百歲(にして)・法滅(返)セント欲(セ)ン時・¹³⁵*若(し)法師(返)有(り)て此の心地經の衆經の中の王(二) (返)を受(二) | 持 | 讀 | 習 | 解 | 說 | 書 | 寫 | セン(三八ウ5、・す・(・メツす・)・む・と・す・む・)・す・(・シヨシヤす・)・む・)

*「若」 右下にヲコト点らしき斜線あるが、未詳。

○若(し)善男子善女人(返)有(り)て此(の)法師(返) (を)供養尊重(セ)ン者(即(ち)十方三世の一切の諸佛を供養するに爲(訓)る。(三九オ2、・す・(・ソソヂユウす・)・む・)

○是の大法師・无佛の時(返)に在(り)て濁惡世の邪見の有情(返)の爲に甚深の心地經王(返)を演説して惡見(返)を離(ハ)レ菩提道(二) (返)に趣(二) | 使(三) | メ | 廣 | 宣流 | 布して法を久(し)く*住(セ)令(ム)レハなり。(三九オ5、・はなる・しむ・)・す・(・ヂユウす・)・しむ・ば・)

*「住」 右傍仮名「セシ」、「令」字の仮名「セシムレハ」と重複。

○若(し)善男子善女人(返)有(り)て此の法師(二) (返)

を合(二) | 掌恭 | 敬セハ「者」・我(む)・无上大菩提の記を授(二) | く。(三九ウ4、・す・(・クキヤウす・)・ば・われ・)

○若(し)人・¹³⁶此(の)心地經(二) (返)を聞(二) (く)こと)得(三)て四恩(返)を報センか爲に菩提心(返)を發して若(は)自(ら)*書(平)し若(は)¹³⁷人(返) (を)使(て)書(返) (か)「使」(再讀) (め) 若(は)讀念通利(四)オオ1、・す・(・ホウズ・)・む・)・す・(・ツウリス・)・む・)

*「書」 平声及び平声輕の声点あり。平声輕の声点付近に擦り消した跡あり。

○是(返) (の)如(き)人等・獲(返)む所の福德・佛の智力(返)を以(て)多少(返)を籌(去)量センに其の邊を得(得)。(四〇オ3、・チウ・す・(・ヂウラウす・)・む・)

○一切の諸天・梵王・帝釋・四大天王・訶(去)利(上)底(上)母・五百の眷屬・彌(去)羅¹³⁸跋(入)多大鬼神王・龍神八部・一切聽法の諸の鬼神等・晝夜に離(ハ)レ不(レ)して常に當に是(返) (の)如(き)佛子(返)を擁護して念慧(返)を増長し无礙辯(返)を與(テ)衆生(返)を教化して佛因(二) (返)を種(二) | エ令(三) | む | 「當」(再讀) | (四) | し。(四〇オ4、・)・テイ・(・カリタイモ・)・ニラ・(・ニラバツ・)・はなる・あたふ・うう・)

○文殊師利 是(の)如(き)善男子善女人・命終の時(返)に臨(み)て¹³⁹現前に十方の諸佛(返)を見タテマツル(二) (返)

ト得 三業亂レ不。(四〇ウ3、・みる・たてまつる・こと
・う・みだる・)

○云何ナルヲカ十(と)爲ル。(四〇ウ5、・いかなり・を
・か・す・)

○二(は)「者」目睛(去)露ナラ不。(四一オ1、・あらは
なり・)

○三(は)「者」手掉(平濁)動(平)「イ、掉動」(せ)不。
(四一オ1、・デウ・す・(・デウヅウす・)・さわぐ・う
ごく・)

○四(は)「者」足伸(平)縮「イ、伸縮」(すること)
无(から)む。(四一オ2、・シムシユク・(・シンスク・)
・のぶ・しじまる・)

○五(は)「者」便一溺(入)遺(平)不。(四一オ2、
・ニヤク・(・ベンニヤク・)・キす・(・ユイす・))

○六(は)「者」體(平)汗流レ不(四一オ2、・あせ・なが
る・)

○七(は)「者」外に捫(去) *模(平) (せ)不(四一オ3、
・モンモす・)

*「模」 本行「權」字を見せ消ちし、右傍に訂す。

○八(は)「者」手拳舒ヒ展ヒタラン(四一オ3、・のぶ
のぶ・たり・む・)

○九(は)「者」顔容改ラ不。(四一オ3、・あらたまる・)

○十(は)「者」 *轉一側自一 *如ナラン。(四一オ4、
なり・む・)

*「轉」 「轉」字から「自」字にかけて、右傍に角筆仮名あるか。

*「如」 右傍仮名「ナナラン」とあるが、未詳。

○經力(返)に由(る)か故に 是(返) (の)如(き)相有(二)
ラン。(四一オ4、・あり・む・)

○八(は)「者」眷屬(返)に背力不(四一ウ3、・そむく・)

○九(は)「者」人天敬愛セン(四一ウ3、・キヤウアイす・)・む・)

○十(は)「者」佛の所説(返)を讚メン(四一ウ4、・ほむ
・む・)

○是(返) (の)如(き)善語・皆(な)此(の)經に由ラ
ン。(四一ウ4、・よる・む・)

○二(は)「者」結恨を懷力不。(四一ウ5、・いだく・)

○三(は)「者」慳(去)心を生セ不。(四二オ1、・ケン
・(・ケンシム・)・す・(・シヤウズ・))

○五(は)「者」過惡を説力不(四二オ1、・とく・)

○七(は)「者」顛¹⁴⁰倒の心无カララン(四二オ2、・なし・
む・)

○九(は)「者」七慢を遠¹⁴¹離セン。(四二オ3、
・(・ランリス・)・む・)

○十(は)「者」「欲」一切の佛法(二) (返)を證得(三)し
三*昧(二)を*圓(三)滿セント樂(三) (ふ)「イ、一切

(の)佛法(を)證得(し)三昧(を)圓滿欲ン(と)樂
(ふ)」。 (四二オ3、
・(・エンマンす・)・む・と
・(・エンマンす・)・む・)

*「昧」 左傍、一点を擦り消した跡あり。

*「圓」 左傍、二点を擦り消した跡あり。

○文殊師利 是(返) (の) 如(き) 功德・皆(な) 深妙の
經典(二) (返) を受―持―読―習―通―利―解―説―書―
寫(二) する難思議の力(三) に由(四) レリ。(四二才4、
よる・り・)

○此の心地經は無量處(返) に於ても无量時(返) に於ても
聞(く) こと得可(から) 不。(四二ウ1、・う・)

○何(に) ―況ヤ見(返) ること得 具足して修*習セ
ンヲヤ。(四二ウ2、・や・う・・す・(・シユジフす・)
・む・を・や・)

*「習」 「し」「て」のヲコト点を擦り消した跡あり。

○汝等大會・一心に奉持して 速に凡夫(返) を捨テ、當
に佛道(を) 成(す) 「當」(再讀) し。(四二ウ2、・すつ
・て・)

○爾(の) 時文殊師利法王子等の无量大菩薩・智光菩薩等
の新發意の菩薩 阿若憍陳如等の諸大聲聞・天龍八部・人
非人衆・各―各に―一心に・佛説(返) を受持して皆(な)
大に歡喜し信受奉 143 行シキ(四二ウ3、・・・す・(・ブギ
ヤウす・)・き・)

1 「座」 「座從(リ) 起チテ「て」」とする。

2 「理」

3 「著」

4 「者」

5 「會」

6 「智」

7 「自」

8 「引」

9 「炬」

10 「作」

11 「戰」

12 「疾」

13 「誰」

14 「法」

15 「今」

16 「暫」

17 「故」

18 「電」

19 「猴」

20 「暫」

「て」のヲコト点を反映する。

底本「著」字を「着」字で表記。以降の同字
についても同様。

「に」のヲコト点を反映せず、「を」のヲコト
点があるとする。

朱と角両筆による「カツテ」の仮名があると
する。

「地」とする。

右傍仮名「ミツカラ」を抹消とする。

右傍仮名「□キ」を抹消とする。

「に」のヲコト点を反映せず。

朱と角両筆による「タリ」の仮名があるとす
る。

右傍角筆仮名を「セン」とする。

「く」のヲコト点を反映する。

右傍仮名「タレ」を反映せず。

「は」のヲコト点を擦り消しとする。

二字の間の合符、左寄りであるとする。

底本「暫」字を「暫」字で表記。以降の同字
についても同様。

「に」のヲコト点を反映せず。

右傍の角筆仮名「テン」に「？」を付す。

角と朱両筆による「コ」の仮名があるとする。

朱と角両筆による「シハラクも」の仮名及び

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21					
「主」	「主」	「照」	「螺」	「鼓」	「流」	「敵」	「悟」	「知」	「水」	「无」	「大」	「犯」	「悟」	「牝」	「猪」	「僻」	「汚」	「如」					
句点を中黒点とする。	「王」とする。	「す」のヲコト点を反映せず。	朱と角両筆による「ラ」の仮名があるとする。	右傍角筆仮名「コ」を反映せず。	点があるとする。	「を」のヲコト点を反映せず、「に」のヲコト点を反映せず。	本用例集では「軍」字に同様の注あり。	「ヲコト点「に」を擦消。左訓読めず」とする。	朱と角両筆による「サトル」の仮名があるとする。	「の」のヲコト点を反映せず。	「く」のヲコト点を反映せず。	以下二文字、「小大」とする。	右傍角筆仮名を「ホム」とする。	「る」点を反映する。	右傍仮名を「ヒン」とする。	「猪」とする。	「假」とする。	右下の符号、「し」のヲコト点であるとする。	左傍仮名「ケカス」が「皿」字に付されているとする。				
61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40		
「空」	「是」	「從」	「邪」	「餘」	「燒」	「盛」	「密」	「令」	「爲」	「發」	「速」	「就」	「就」	「界」	「來」	「盈」	「又」	「更」	「愛」	「爲」	「時」		
句点があるとする。	右傍仮名「コ」を反映せず。	右傍仮名を「シタカへ」とする。	同様の書き換えがみられる箇所あり。	底本「邪」字を「耶」字で表記。以降にも、	「こと」のヲコト点を反映せず。	「く」のヲコト点があるとする。	「も」のヲコト点を反映せず。	「に」のヲコト点を反映せず。	右傍仮名を「シメタマへ」とする。	中黒点を反映せず。	心と名（づく）る」とする。	句点を反映せず、「心」字を前文に続けて「發」	中黒点を反映せず。	文末に句点を付す。	左下の朱線を「たり」のヲコト点とする。	「に」のヲコト点があるとする。	「の」のヲコト点を反映せず。	右傍仮名を「ヤウ」とする。	右傍仮名を「アサレヨ」とする。	右傍「終」字を「経」字とする。	「受」とする。	「す」のヲコト点を反映せず。	右傍に「シ」の角筆仮名があるとする。

82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62
「如」	「陀」	「蘇」	「災」	「能」	「中」	「里」	「苦」	「近」	「遠」	「清」	「闡」	「就」	「持」	「不」	「縁」	「心」	「執」	「除」	「有」	
「し」のヲコト点を反映せず。	朱と角両筆による「タ」の仮名があるとする。	朱と角両筆による「ソ」の仮名があるとする。	「炎」とする。	平声点があるとする。	「示十平」「秤」とする。	以下三文字、「暗闇夜」とする。	右傍仮名を「ニガキ」とする。また、同字に「き」のヲコト点があるとする。	右傍仮名を「チカヅクニ」と起し、「ル」の仮名は反映せず。	右傍仮名を「トヲサカルニ」とする。	「消」とする。	右傍角筆仮名を「セン」とする。	「熟」とする。	「て」のヲコト点を反映せず。	「す」のヲコト点を反映せず。	「す」のヲコト点があるとする。	中黒点を反映せず。	「も」のヲコト点を反映せず。	右傍仮名を「ノソカム」とする。	点があるとする。	「の」のヲコト点を反映せず、「る」のヲコト
103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83
「求」	「體」	「蟻」	「着」	「告」	「説」	「漸」	「心」	「妙」	「譬」	「毘」	「印」	「右」	「手」	「握」	「十」	「頭」	「日」	「金」	「生」	「速」
「こと」のヲコト点があるとする。	「髓」とする。	朱と角両筆による「マテ」の仮名があるとする。	「る」のヲコト点を反映する。	「て」のヲコト点があるとする。	右傍仮名「タマフ」を擦り消しとする。	右傍仮名を「ヤウ」とする。	中黒点を反映せず。	同字の下に「觀」字あり。	「は」のヲコト点を反映せず。	同字の上に「大」字あり。	「は」のヲコト点を反映せず。	「左」とする。	当該文字なし。	朱と角両筆による「アク」の仮名があるとする。	「小」とする。	同字の下に「指」字あり。	「白」とする。	「の」のヲコト点があるとする。	中黒点を反映せず。	右傍仮名を「スミヤカニ」と起し、「に」のヲコト点は反映せず。

121	120	119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104
「令」	「今」	「言」	「櫻」	「學」	「甲」	「若」	「果」	「己」	「佗」	「如」	「事」	「事」	「觀」	「者」	「怨」	「心」	「貧」
右傍仮名を「シメム」とする。	「今」字と「者」字の間の合符、左寄りであるとする。	「く」のヲコト点は反映せず、右傍仮名を「マウサク」とする。	「櫻」とする。	仮名は反映せず、「する」のヲコト点があるとする。	「甲」字と「冑」字の間の合符を反映せず。	「と」のヲコト点があるとして、右傍仮名「ト」は反映せず。	朱と角両筆による「を」のヲコト点があるとする。	「か」のヲコト点を反映せず。	「他」とする。	「と」のヲコト点を反映せず。	中黒点を反映せず。	右傍に「ヲ」の仮名があるとする。	右傍の「ミル」を角筆仮名とする。	当該文字なし。	朱と角両筆による「ヲム」の仮名があるとする。	朱と角両筆による「セ」の仮名があるとする。	「貧」とする。

137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127	126	125	124	123	122
「人」	「此」	「若」	「彼」	「聞」	「乃」	「乃」	「者」	「提」	「當」	「悉」	「樂」	「量」	「斷」	「障」	「諸」
「を」のヲコト点があるとする。	「是」とする。	右下の符号を「し」のヲコト点とする。	「の」のヲコト点を反映せず。	同字の下に「衆」字あり。	中黒点があるとする。	「し」のヲコト点を反映せず。	「に」のヲコト点を反映せず。	朱と角両筆による「を」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「に」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「く」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「を」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「の」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「て」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「を」のヲコト点があるとする。	朱と角両筆による「の」のヲコト点があるとする。

143142	「何」	「何」字と「況」字の間の合符を反映せず。
	「行」	「し」のヨコト点を反映せず。
141140139138	「跋」	「跋」とする。
	「現」	「眼」とする。
	「倒」	「の」のヨコト点を反映せず。
	「離」	仮名は反映せず、「せん」のヨコト点があると する。

おわりに

以上、未熟ながらも宮内庁書陵部蔵『大乘本生心地観経』の訓読文用例集の作成を試みた。猶、本用例集では、底本に付された加点を可能な限り拾い上げ、翻字本文に反映させることに重点を置いた。その結果、複数の異読が立ち、文の構成が煩雑になっていることをお断りしておく。

検索用語の掲出の仕方については、未だ模索段階である。本用例集では、如何にして検索用語を統一し、検索者による揺れ及び検索漏れを最小限に止めるかに重点を置き、検索用語を呉音に統一するという方法をとった。しかし、それにより、実際に付されている読みと検索用語との間に乖

離が生じてしまった。これらの点以外にも、多々不備が存するかと思われるが、大方のご批評を賜れば幸いである。

【付記】

本用例集は、松本光隆広島大学教授が昭和六十一年に書写・移点した移点本を借用し、底本としたものである。